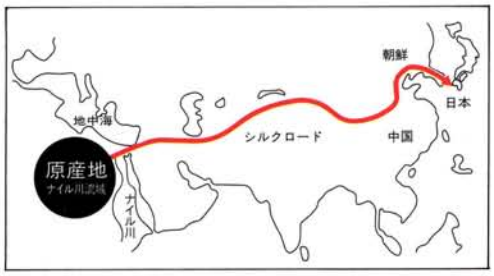
紅花（べにばな）

紅花の原産地



今ではハナといえばさくらのことですが、昔は紅花のことでした。ハナ畑・ハナ摘み・生バナ・ハナ寝せ・干バナ・水バナ・ハナ染など、いずれも紅花にかかわることばです。

紅花は地中海沿岸、またはエジプトが原産地といわれているキク科の植物です。耐寒性で、茎の高さが１メートル内外、７月上旬には茎頂にアザミに似た鮮黄色の可憐な花をつけます。

それでは、紅花は原産地のエジプトから、どういう道をたどって日本に来たのでしょうか。

中国の有名な『西域物語』という本には、「今から2200年程前に張騫（ちょうけん）という人が中央アジアに行った時紅花の種を持って来た」と書いてあります。漢の武帝の時代のことで、張騫は紀元前139年、武帝の使者として長安を出発しました。武帝は大月氏と結んで匈奴を攻めようというはからいでしたが、張騫は不運にも途中で匈奴に捕えられますが、自力で脱出して長安にもどって来た、というえらい人物でした。

張騫が紅花を中国に持ってきたというのは、彼の偉大さを伝えるための物語りで、紅花の普及は決して彼一人の力ではなかったと思われます。シルクロード沿いに住む多くの人たちが、長い年月をかけて次々に紅花の栽培法と染色法を中国に伝えたのでしょう。

中国産の絹はヨーロッパ人から好まれ、シルクロード（絹の道）を通って西へ運ばれましたが、紅花は同じ道を西から東へ渡って、中国にきたことは確かです。

文化の東漸にしたがって、中央アジアからインドなどに伝播した紅花は、推古天皇の時代（593～629）に中国との文化の交流によって、わが国にもたらされたといわれています。

紅花の植物誌

学名〈Carthamus Tinctorius L.〉1753年にリンネにより命名
（アラビア語の染める）（ラテン語の染色用の）

【双子植物綱―合弁花亜綱―ききょう目―きく科―きく亜科―管状花族―あざみ類―やまくぼち亜類―べにばな属（20種）】

草たけ0.5～1.2m、葉は硬く、互生し、深緑色、広皮針形で先がとがり、ふちに鋭いとげ状のきょ歯があり、７月上旬アザミに似た鮮黄色の花をつけ、花弁はやがて赤色に変化します。花は茎頂につき、管状花で径2.5～4.0cm、長さ2.5cmくらいの頭花をつくり、最初に開花するのが主茎頂花で、ついで各節の第１次分枝頂花が開花、その後第２次分枝が開花します。総苞は外側のものが大きく、葉状となり（包葉）、ふちにとげがあり、そう果（子実）は白色で、光沢があり、長さ６㎜、冠毛は非常に短く、８月上旬に成熟期に達します。茎の太さは７～８㎜で７～15本くらいの分枝が発生し、根は直根性の太い根が発達し、移植を嫌います。

染色資料、口紅などの化粧用として栽培されています。

紅花の品種

現在、県内に栽培されている紅花は、ほとんどが出羽在来種の中生種の中から山形県立農業試験場で系統分離した「もがみべにばな」と呼ばれているものです。また、在来種の中から系統選抜したものに「とげなしべにばな」があり、これは、主に切花用に用いられています。その他、紅色素を持たない「黄色種」や「白色種」などの変わった紅花もあり、さらに早生種、晩生種、アメリカ種、岡山種、中国種、カシュガル種、イスラエル種、ブラジル種等があります。

もがみべにばな	項　目	とげなしべにばな
葉先に鋭いとげ	と　げ	発達していない
約１m	草たけ	約70cm
７～15本	分枝数	少ない
小さい	花　冠	大きい
薄い	葉　色	濃い
７月上旬	開花期	６月下旬

もがみべにばな

とげなしべにばな

用途と効用

花……生花、ドライフラワー（鑑賞用）
　　干紅花（薬用、嗜好品、茶、酒）
　　紅色素（着色剤、化粧用、染用、薬用、美術用）
　　黄色素（着色剤、染用、美術用）
実……紅花油（食用、薬用、塗料、紅花墨）
　　絞り粕（肥料、飼料）
葉……（食用、茶）
茎……（茶、飼料）

紅花の花弁に含まれる色素には水に溶けるサフロールイエロー（黄色）と水に溶けないカルタミン（紅色）があり、ともに染料にされます。

純度の高いカルタミンを口紅としてぬれば、唇の荒れを防ぎ血行をよくし、紅で染めた布を肌につけると体が温まるというので腹巻・たび・ゆもじ・腹帯に使用しました。出羽三山参りの行者の腹巻にも紅花染が使われたといわれますし、冷え性の婦人に薬効があるというので、花を陰干しして煎じて飲んだりしました。

紅花の種子からは、血管壁についたコレステロールを除く働きを持ち、高血圧予防に効果があるとされているリノール酸を含む良質のサフラワー油がとれます。サラダ油・天ぷら油・マーガリン等の食用油として使われています。また、種子の油を灯油に用い、その際に出るすすで紅花墨という上質の墨が作られます。

若い茎葉は上等の野菜となり、花は活花やドライフラワーとして使われます。

紅花のそだて方

①種播き……1㎡当たり完熟堆肥4kg、化学肥料100g、苦土石灰700gをめやすに散布します。3月下旬～4月上旬、排水のよい土地に種を1穴に3～4粒をまいて種子がかくれる位土をかけます。

②間引き……4月中旬ころから20センチくらいになるまでの間に2～3回間引きをして、1平方メートルに25本くらいにします。（間引きしたものは、おひたしなどにして食べられます。）

③追　肥……4月下旬から5月下旬に軽く化学肥料を追肥し土寄せします。

④病害虫防除……炭素病に弱いのでエムダイファー水和剤、マンネブダイセンM水和剤、メルクデランK水和剤600倍のいずれかを7～10日間隔でていねいに散布します。アブラムシを防ぐためオルトラン粒剤を散布します。

⑤花……7月上旬ごろから花が咲きます。花弁が十分に開いたら、切り花にできます。開花して花弁に朱色がさした頃、花弁をつみとり干紅花にします。

⑥ドライフラワー…生花を風通しのよい日陰に、雨が当たらないようにして約1ヵ月つるしておけば、きれいなドライフラワーができます。

⑦種子……種子をとるには、花の咲いたまま栽培をつづけ、枯れあがってから脱粒します。

染料の種類

天然染料と化学染料があるが、化学染料は19世紀に発明されたもので、わが国への輸入は幕末と伝えられ、アニリン染めと呼ばれていました。取り扱いが簡単でしかも色相の多い化学染料の発明は画期的な出来事で、たちまち、紅花も含め植物性染料の世界を侵してしまいました。しかし、化学染料にはない色相の深みと、長年用いられてきた技術の伝統的な落ち着きをもった天然染料は、その後、その美しさが見直され、本物を愛する人々にもてはやされています。

植物染料には、植物そのものが染料となるものと、種々工作して染料になるものとがあります。原料も、葉・茎・幹・皮・花・実・根と染料をふくんでいる部分が違っており、また色素も、直接染料と媒染染料があり、媒染剤によっていろいろ変化します。

主な植物染料

赤……紅花（花）・蘇芳（すおう）（木）・茜（あかね）（根）
黄……黄蘗（きはだ）（木皮）・刈安（かりやす）（茎・葉・根）
　　鬱金（うこん）（根茎）・山梔子（くちなし）（実）・紅花
青……藍（葉・茎）・露草（花）
紫……紫草（根）
茶・黒……橡（つるばみ）（樹皮・根皮・実のへた）
　　檳榔樹（びんろうじゅ）（実）

紅花染の技法（色の出し方）

陽光に色褪せやすく移ろいやすい紅の色、そしてやわらかい暖かみのある優雅な紅の色。紅花は赤色と黄色の色素を含んでいます。

きれいな紅色に染めるには、水に溶ける黄色をできるだけ取り除きます。赤の色素は木綿・絹が非常に良く染まりますが、黄の色素は絹には染まり木綿には染まりにくい性質です。絹・麻・木綿などの材質によって、濃染めの紅から桃色・黄色などに染まります。

黄……紅花の黄色の染料で染めます。
淡　紅……紅花の紅色の染料で一回染めます。
濃　紅……紅花の紅色の染料で数回重ね染めします。
オレンジ…紅色の染料で数回重ね染めし、その上に黄はだを上掛けします。
（紅染めの色止めに使われます。）
ローズ……紅色で下染めをし、栗のいがの染液をうすめたもので上染し、銅媒染で仕上げます。
あずき色…紅色で下染めをし、栗のいがの染液をうすめたもので上染し、鉄媒染で仕上げます。
グリーン…紅花の黄色で下染めをし、藍で上染めします。
二　藍……紅花（呉藍）の紅色の上に藍で上染めします。
朱華（黄丹）……くちなしや、うこんで下染めをし、濃い紅色を掛け合せます。
檳榔樹黒（紅下檳榔樹）……紅で下染めし、檳榔樹と五倍子の煎汁を配合して引き染めし、鉄塩で黒く発色します。

誰にでもできる紅花染

1．花びらを摘む。（花の色が黄色から山吹色に変わり、朱色が指した頃）
2．水あらいする。
3．軽く絞ってビニールの袋に入れて密封する。
4．一昼夜のちに取り出し、すり鉢ですりつぶす。
5．すりつぶした花を固く絞って銭状にし、一週間から十日間、風通しのよい日陰で乾燥させる。これを紅餅という。
6．紅餅（染める布の量と同量の紅餅が必要）を木綿の袋に入れて一昼夜水出しする。
7．一昼夜過ぎると水が黄色になる。漬けこんだ袋をしぼって、取り出す。この最初の黄色の液が黄汁染の染料となる。
8．再度水を取り替えて、５時間ぐらい漬けこみ、もみ出して、絞り出す。これを１日、３回繰り返す。
9．８番の工程を黄色の液が出なくなるまで一週間ぐらい繰り返す。
10．薬局で市販している炭酸カリの８％溶液を作り、先程の袋をつけこむ。
11．10分毎にもみ出し、30分後に絞る。
12．また新しい炭酸カリ８％溶液に11番の工程を繰り返す。
13．12番の工程をもう一度繰り返し、都合３回分の液を作る。
14．３回作った液を一緒にする。これが、紅染をする紅汁の染料である。
15．染める布を水に漬けて、かるく絞る。
16．その布を先程作った染料に浸して染め始める。
17．５分後に薬局で市販しているクエン酸の10％溶液を湯呑み茶碗一杯分作り、染めている布を取り除いてから少量（杯２杯）ずつ入れて布を浸す。
18．17番の工程を湯呑み茶碗一杯分のクエン酸溶液がなくなるまで繰り返す。（少量ずつ入れるのはムラ染めを防ぐためである。）
19．漬けっぱなしにしないで、時々動かしながら染めるのがコツ。
20．赤色の液が黄色に変わってきたら、布を取り出す。
21．新たにクエン酸10％溶液を布が浸るくらいの量だけ作り、10分間漬けこんで色止めする。
22．布を取り出して水洗いをし、陰干しする。

紅花酒のつくり方

1．ホワイトリカー（ドライ35）1.8ℓに紅餅５袋と中ざらめ砂糖500gを広口のビンに入れ密閉して20日間ねかす。
2．砂糖をとかすため１日１回ビンを振りまぜると良い。
3．20日間が過ぎたら、広口のビンに木綿で漉しながら、花びらを取り除く。
4．冷蔵庫に入れて冷やして10日間ねかす。冷やさないと色がぬける。
5．10日間ぐらいねかすと飲みごろになるが、そのままか、タンサンで割って飲む。

効　用……血圧・胃腸・婦人病・神経痛等数多くの効用があるとされている。

紅粉（口紅）の精製法

1．紅餅をきざんで、一晩水に浸す。木綿の袋に入れ、よく揉んで黄汁を洗い捨てる。

2．ザルに移し、灰水をかけ、紅汁をとりだす。紅汁に梅酢を加え紅を発色させる。

3．青苧布を紅汁に浸し、浸し染めと手絞りを何度も繰り返し紅を布に付着させる。

4．紅が付着した布（これを「ぞく」という）を水洗いして、これに煮えた灰水をかけ、紅の色素をとり出す。

5．この紅の色素に再び梅酢を加え、絹布を敷いた紅舟に流し込む。

6．これを何回もくりかえし、絹布に沈澱した紅をすくい、瀬戸の容器（紅皿）に集める。